

「言語の働き」について

【現状と課題】

これまでの議論・課題

- 現行の学習指導要領においては、言語活動で取り上げるべき、言語が果たす機能を「言語の働き」として例示している
- 本WGの構造化の議論において、「言語の働き」については、
・外国語の「目標」では「言語の働き」が「知・技」に位置付けられている一方、「内容」の「知・技」や「内容の取扱い」の本文には具体的な記述がなく、言語活動で取り上げるべきものとして「思・判・表」とは別に言語活動・言語の使用場面とともに例示されており、資質・能力との関係が分かりにくい

との課題を踏まえ、

- ・外国語の「目標」において「知・技」に位置付けられていることとの整合性や、言語活動を行う場合のみならず、語彙や表現、文法事項等の指導において、その働きについても意識することが重要であると考えられることから、例示の内容について整理・見直した上で、「内容」の「知・技」に位置付けることが適当ではないか

と方向づけた。

- 一方で、
・現在の「言語の働き」は、言語活動で取り上げることを想定して例示されているものであるため、「知・技」の内容としてそのまま位置付けるにはなじまない内容となっている
 - ・「言語の働き」という文言が一般的に分かりにくく、教師や児童生徒にとって、達成したい趣旨が明確になるような文言とすべき
- 等の指摘もあったところ
- このため、具体的な位置付け方や文言について、検討する必要がある

【方向性と具体的論点（案）】

1. 知・技の指導における位置付け

- 知識及び技能の指導において、
 - ・同じ語彙や表現、文法事項等でも、使用される場面や状況などに応じた様々な意味や使い方があることを意識させることや、
 - ・似たような意味や使い方がある既習事項を整理し、使えるようにすることは、知識をコミュニケーションで使える技能とするために重要であるとともに、コミュニケーションを行う目的を達成しやすく、思考力、判断力、表現力等の育成にも資するものである。このため、学習指導要領本文に位置付けるべきである
- その際の位置付け方として、
 - ①「内容」の「知・技」に、現行の「言語の働き」のような事項を例示して指導事項として位置付ける
 - ②「指導計画の作成と内容の取扱い」に、知・技の指導の際の留意事項として位置付けるの2通りが考えられるが、以下の理由から、上記②のとおり、「指導計画の作成と内容の取扱い」に、知・技の指導の留意事項として位置付けることが適当ではないか
 - ・児童生徒の実態に応じて、既習事項を整理しながら段階的に指導するべきものと考えられること
 - ・上記①のとおり、「内容」の「知・技」に指導事項として位置付けた場合、実際の指導や評価において、現行の「言語の働き」のような事項をどの程度取り扱えば良いのかが分かりにくく、資質・能力の内容としては抽象的な記載となり、分かりやすく使いやすい学習指導要領という趣旨に沿わないと考えられること

2. コミュニケーション活動における位置付け

- 主に思・判・表を育成する「コミュニケーション活動」の中で、現在の「言語の働き」のような事項を、コミュニケーションを行う目的や場面、状況などを設定し、目的の達成に向けて、伝える内容や順序などを意識しながら既習の知識及び技能を駆使することは、引き続き重要であると考えられる
- その際、現行においても、主に教材に組み込まれることを念頭に規定されていることから、その趣旨を明確化するよう、「指導計画の作成と内容の取扱い」に「教材に関する留意事項」として位置付け、分かりやすさの観点から「コミュニケーションの類型（意図）」としてはどうか

構造化のイメージ（中学校の例）（Ver.2）

現状

外国語の目標

知識及び技能

思考力、判断力、表現力等

学びに向かう力・人間性等

英語の目標（領域別目標）

聞くこと

読むこと

話すこと（やり取り）

話すこと（発表）

書くこと

内容

知識及び技能

音声/符号/語、連語及び慣用表現/文、文構造及び文法事項

思考力・判断力・表現力等

言語活動(例)

聞くこと

読むこと

話すこと（やり取り）

話すこと（発表）

書くこと

言語の使用場面(例)

言語の働き(例)

指導計画の作成と内容の取扱い

言語材料の段階的な指導、指導内容や指導方法の工夫 など

改善イメージ

外国語の目標

知識及び技能

思考力、判断力、表現力等

学びに向かう力・人間性等

英語の目標

英語の目標は3つの柱で整理

知識及び技能

思考力、判断力、表現力等

学びに向かう力・人間性等

内容

思考力・判断力・表現力等

CEFRの分類も参照し3つに整理

思考力、判断力、表現力等の総合的な発揮
(理解する) (表現する) (伝え合う)

聞くこと

読むこと

話すこと（やり取り）

話すこと（発表）

書くこと

領域別目標の要素を「内容」に位置付け、段階的な高度化と資質・能力の深まりを示す

知・技における「コミュニケーションの類型（意図）」の扱い方を「指導計画の作成と内容の取扱い」で明示

「並行」パターンで示す

知識及び技能

知識及び技能に関する統合的な理解

音声/符号/語、連語及び慣用表現/文、文構造及び文法事項 など

※技能は5領域と関連付けて示す

指導計画の作成と内容の取扱い

「内容」は資質・能力に限定し、従来の「言語活動の例」等は「指導計画の作成と内容の取扱い」へ

聞くこと

読むこと

話すこと（やり取り）

話すこと（発表）

書くこと

コミュニケーション活動（例）
コミュニケーションの場面（例）※コミュニケーション活動で取り上げる

コミュニケーションの類型（意図）（例）※コミュニケーション活動で取り上げる

内容の取扱い・解説に盛り込む要素のイメージ（中学校の例）

※本資料はあくまで盛り込むべき要素のイメージを示したものであり、実際の学習指導要領本文及び解説の文章は議論を踏まえて引き続き検討。

本文に盛り込む要素（イメージ）

3 指導計画の作成と内容の取扱い

<指導計画の作成に関する事項>

- コミュニケーション活動は、コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて外国語で理解したり、表現したり、伝え合ったりする活動とし、主に思考力、判断力、表現力等を育成する。コミュニケーション活動を行うに当たっては、別表を参照する

<内容に関する事項> ※（例）は本資料の理解のために示しているものであり、具体的な解説の記述は今後検討。解説で指導の観点や例を示す

- 「コミュニケーション活動」の中では、コミュニケーションを行う目的や場面、状況などを設定し、目的の達成に向けて、伝える内容や順序などを意識しながら既習の知識及び技能を駆使することが重要である

（例：「日本に来たことがない海外の生徒におすすめしたい食べ物を紹介する」活動の場合、まず「挨拶」から入り、相手の好きな食べ物や苦手なものや食べられないものを「質問」し、相手の好みに合わせておすすめ食べ物について「説明」し、おすすめする「理由を述べる」など）

- 「コミュニケーション活動」につながるよう、知識及び技能の指導において、同じ語彙や表現、文法事項等でも、使用される場面や状況などに応じた様々な意味や使い方があることを意識し、使えるようにすることが重要である

（例：「Can you ～？」は、「～ができるか」質問するのみの場合もあれば、「依頼する」（Can you help me?）や「誘う」（Can you come to our school festival?）といった意図を含みうる）

- また、似たような意味や使い方がある既習事項を整理し、使えるようにすることも、知識をコミュニケーションで使える技能とするために重要であるとともに、コミュニケーションの目的を達成しやすく、思考力、判断力、表現力等の育成にも資するものである

（例：「コミュニケーション活動を支える活動」において、様々な「依頼」の仕方について既習の表現を使う など）

※なお、必ずしも毎回上記のような指導をしなければならないものではなく、既習事項を整理する際に生徒の実態に応じて段階的に取り扱うことが必要である

<教材に関する留意事項>

- コミュニケーション活動においては、主として別表に示すような「コミュニケーションの場面」を取り上げるとともに、「コミュニケーションの類型（意図）」を参照し、それに必要な知識及び技能を取り扱うようにする

別表 ※以下は現行を基にした案であり、詳細については別途告示や解説にあたって検討

- ① コミュニケーション活動（具体的な活動を例示）
- ② コミュニケーションの場面（現行の「言語の使用場面の例」を再整理の上、例示）
- ③ **コミュニケーションの類型（意図）**（現行の「言語の働きの例」を再整理の上、例示）

- 「相手との関係を円滑にする」・「気持ちを伝える」（例）挨拶する、…
- 「事実・情報を共有する」・「相手の行動を促す」（例）説明する、…
- 「考えや意図を共有する」（例）意見を言う、…

例示にあつては、CEFRの言語コミュニケーション活動のマクロ機能も参照し、小中高の接続を踏まえつつ、段階的に高度化するようにする

【参考】現行の学習指導要領（本文）における「言語の働き」の例

※下線は、当該学校種等で初めて取り扱うもの

小学校 外国語活動	小学校 外国語	中学校	高等学校（英コミュI）
<p>(ア) コミュニケーションを円滑にする</p> <ul style="list-style-type: none"> 挨拶をする 相づちを打つ など 	<p>(ア) コミュニケーションを円滑にする</p> <ul style="list-style-type: none"> 挨拶をする 相づちを打つ 繰り返す など <u>呼び掛ける</u> <u>聞き直す</u> 	<p>(ア) コミュニケーションを円滑にする</p> <ul style="list-style-type: none"> <u>話し掛ける</u> 聞き直す 相づちを打つ 繰り返す など 	<p>(ア) コミュニケーションを円滑にする</p> <ul style="list-style-type: none"> 相づちを打つ 繰り返す 話題を発展させる <u>聞き直す</u> <u>言い換える</u> <u>話題を変える</u> など
<p>(イ) 気持ちを伝える</p> <ul style="list-style-type: none"> 礼を言う 褒める など 	<p>(イ) 気持ちを伝える</p> <ul style="list-style-type: none"> 礼を言う 褒める <u>謝る</u> など 	<p>(イ) 気持ちを伝える</p> <ul style="list-style-type: none"> 礼を言う 褒める <u>苦情を言う</u> 謝る <u>歓迎する</u> など 	<p>(イ) 気持ちを伝える</p> <ul style="list-style-type: none"> <u>共感する</u> 謝る <u>望む</u> <u>心配する</u> など 褒める <u>感謝する</u> 驚く
<p>(ウ) 事実・情報を伝える</p> <ul style="list-style-type: none"> 説明する 答える など 	<p>(ウ) 事実・情報を伝える</p> <ul style="list-style-type: none"> 説明する 発表する など <u>報告する</u> 	<p>(ウ) 事実・情報を伝える</p> <ul style="list-style-type: none"> 説明する 発表する <u>描写する</u> など <u>報告する</u> 	<p>(ウ) 事実・情報を伝える</p> <ul style="list-style-type: none"> 説明する 描写する 要約する <u>報告する</u> <u>理由を述べる</u> <u>訂正する</u> など
<p>(エ) 考えや意図を伝える</p> <ul style="list-style-type: none"> 申し出る 意見を言う など 	<p>(エ) 考えや意図を伝える</p> <ul style="list-style-type: none"> 申し出る 賛成する 断る など <u>意見を言う</u> <u>承諾する</u> 	<p>(エ) 考えや意図を伝える</p> <ul style="list-style-type: none"> 申し出る 意見を言う 反対する 断る <u>約束する</u> <u>賛成する</u> <u>承諾する</u> <u>仮定する</u> など 	<p>(エ) 考えや意図を伝える</p> <ul style="list-style-type: none"> 提案する 賛成する 承諾する 主張する 仮定する 申し出る 反対する 断る <u>推論する</u> など
<p>(オ) 相手の行動を促す</p> <ul style="list-style-type: none"> 質問する 依頼する 命令する など 	<p>(オ) 相手の行動を促す</p> <ul style="list-style-type: none"> 質問する 依頼する 命令する など 	<p>(オ) 相手の行動を促す</p> <ul style="list-style-type: none"> 質問する 依頼する <u>招待する</u> 命令する など 	<p>(オ) 相手の行動を促す</p> <ul style="list-style-type: none"> 質問する 誘う <u>助言する</u> <u>注意をひく</u> 依頼する <u>許可する</u> 命令する <u>説得する</u> など

【参考】現行の学習指導要領における「言語の働き」等に関する主な記載（小学校）

外国語活動

【本文】

内容〔思考力、判断力、表現力等〕（3）言語活動及び言語の働きに関する事項

② 言語の働きに関する事項

言語活動を行うに当たり、主として次に示すような言語の使用場面や言語の働きを取り上げるようにする。

【解説】

「言語の働き」とは、言語を用いてコミュニケーションを図ることで達成できることを表している。具体的には、「コミュニケーションを円滑にする」、「気持ちを伝える」、「事実・情報を伝える」、「考えや意図を伝える」、「相手の行動を促す」であり、それぞれに代表的な例を示した。

改訂前の高学年における外国語活動では、中学校の外国語科で「言語の働き」としていたのに対して、「コミュニケーションの働き」としていたが、今回の改訂においては、高学年の外国語科とともに、小学校、中学校、高等学校で一貫した目標を設定していることから、中学校の外国語科と同様「言語の働き」とした。さらに、改訂前の高学年における外国語活動では、コミュニケーションの働きとして、「相手との関係を円滑にする」、「気持ちを伝える」、「事実を伝える」、「考えや意図を伝える」、「相手の行動を促す」としており、中学校の外国語科の「言語の働き」として示していた、「コミュニケーションを円滑にする」、「気持ちを伝える」、「情報を伝える」、「考えや意図を伝える」、「相手の行動を促す」と異なる部分もあったが、今回は中学年の外国語活動、高学年の外国語科、中学校の外国語科で共通の文言とし、小学校中学年の外国語活動から中学校の外国語科までのつながりがより明確になるようにした。

外国語

【本文】

内容〔思考力、判断力、表現力等〕（3）言語活動及び言語の働きに関する事項

② 言語の働きに関する事項

言語活動を行うに当たり、主として次に示すような言語の使用場面や言語の働きを取り上げるようにする。

【解説】

言語の働きについては、小学校中学年や中・高等学校における分類との対応関係を分かりやすくするために統一を図り、「コミュニケーションを円滑にする」、「気持ちを伝える」、「事実・情報を伝える」、「考えや意図を伝える」及び「相手の行動を促す」の五つに整理して、それぞれ代表的な例を示した。

なお、中学校第1学年において言語活動を行う際には、小学校でも慣れ親しんだことのあるような身近な言語の使用場面や言語の働きを取り上げることで、中学校における外国語の学習の円滑な導入を図ることとしている。

【参考】現行の学習指導要領における「言語の働き」等に関する主な記載（中学校）

【本文】

内容〔思考力、判断力、表現力等〕（3）言語活動及び言語の働きに関する事項

② 言語の働きに関する事項

言語活動を行うに当たり、主として次に示すような言語の使用場面や言語の働きを取り上げるようにする。

【解説】

言語の働きについては、前回改訂時より小学校と高等学校における分類との対応関係を分かりやすくするために統一を図っており、今回も「コミュニケーションを円滑にする」、「気持ちを伝える」、「情報を伝える」、「考えや意図を伝える」及び「相手の行動を促す」の五つに整理し、それぞれ代表的な例を示した。なお、第1学年において言語活動を行う際には、小学校でも慣れ親しんだことのあるような身近な言語の使用場面や言語の働きを取り上げることで、中学校における外国語学習の円滑な導入を図ることが重要である。

※〔知識及び技能〕（1）英語の特徴やきまりに関する事項 における記載

ウ 語、連語及び慣用表現

（イ）連語のうち、活用頻度の高いもの

ここでいう「連語」とは、in front of, a lot of, look for などのように、二つ以上の語が結び付いて、あるまとまった意味を表すものを指している。そのうち、「活用頻度の高いもの」とは、第2の2（3）②に示された「ア 言語の使用場面の例」や「イ 言語の働きの例」として挙げられている場面や働きにおいてよく使われる身近な連語のことである。

（ウ）慣用表現のうち、活用頻度の高いもの

ここでいう「慣用表現」とは、ある特定の場面で用いる定型表現を指している。コミュニケーション能力を育成するためには、日常生活でよく用いられる様々な慣用表現を身に付けさせることも重要である。そのうち、「活用頻度の高いもの」とは、（イ）と同様、第2の2（3）②に示された「ア 言語の使用場面の例」や「イ 言語の働きの例」として挙げられている場面や働きにおいてよく使われる身近な慣用表現のことである。これらの慣用表現を場面に応じて使用することによって、円滑なコミュニケーションが可能となる。

慣用表現の選択に当たっては、五つの領域別の目標を達成するために必要とされるものを取り上げるものとする。

なお、小学校の外国語科で例示されている慣用表現は、excuse me, I see, I'm sorry, thank you, you're welcome などである。中学校においては、first of all, on the other hand など、順序立てて論理的に伝えたり、相手に分かりやすく自分の考えを表現したりする際に活用することができる慣用表現も適切に使えるよう指導する。

エ 文、文構造及び文法事項

（ウ）文法事項

c 助動詞

ここでは指導すべき助動詞の種類を示している。接続詞と同様、助動詞は新設の文法事項として扱うこととした。特に一まとまりの慣用的な句を作り、コミュニケーションを図る上で様々な機能を実現する重要なものである。

小学校で扱われる助動詞は can であるが、次のような「能力」を表す場合に限られている。

Can you dance well? Yes, I can.

中学校では、次のように「許可」や「依頼」を表す場合が加わってくる。

You can use my pencil. / Can I use your phone?

Can you open the window?

さらに must（義務）、must not（禁止）、may（許可）、should（義務）などが扱われる。

f 形容詞や副詞を用いた比較表現

なお、比較表現が、どのような言語の働きをもっているかという点に留意しながら指導することも必要である。例えば、“My town is as large as yours.”という文では、聞き手・読み手にとつて既に知っている町（yours）に関する情報に基づきながら、話し手・書き手が自分の町の大きさを相手に伝えようとしているのであり、相手に応じて「説明する」という言語の働きを意識することになる。もし、“My town is as large as Ken's town.”と表現し、聞き手や読み手が Ken の町について知らないとするならば、町の大きさを説明することに失敗していることになる。多くの場合、比較対象は話し手・書き手と聞き手・読み手の間で既知の情報であることに留意し、言語の働きと関連付けて指導するようにする。

【参考】現行の学習指導要領における「言語の働き」等に関する主な記載（高等学校）

【本文】

内容〔思考力、判断力、表現力等〕（3）言語活動及び言語の働きに関する事項

② 言語の働きに関する事項

言語活動を行うに当たり、例えば、次に示すような言語の使用場面や言語の働きの中から、五つの領域別の目標を達成するためにふさわしいものを取り上げ、有機的に組み合わせて活用するようにする。

【解説】

言語の働きについては、小学校及び中学校における分類との対応関係を分かりやすくするために整理をして、一部に高度化を図り、「コミュニケーションを円滑にする」、「気持ちを伝える」、「事実・情報を伝える」、「考えや意図を伝える」及び「相手の行動を促す」の五つに整理し、それぞれ代表的な例を示した。

有機的に組み合わせて活用するとは、取り上げた言語の使用場面において果たされる言語の働きや、取り上げた言語の働きが生じる言語の使用場面を選択して組み合わせることを意味している。コミュニケーションにおいて言語は、具体的な場面で、具体的な働きを果たすために使用されるのであり、コミュニケーション能力の育成を図るためには、言語の使用場面と働きを明らかにし、具体的な文脈を想定した上で指導に当たることが重要である。

学習する語句や表現、文法事項の中には、特定の場面や言語の働きと密接に結び付いていたり、特定の題材やテーマについてコミュニケーションを進める上で重要であったりするものが多い。文法項目や文構造の取扱いについては、それらが具体的な言語の使用場面でのどのような働きをするのかを併せて例示し、実際の場面で活用できるよう指導する必要がある。

なお、本科目の学習の初期の段階において言語活動を行う際には、中学校で学習した身近な言語の使用場面や言語の働きを取り上げることで、高等学校における外国語学習の円滑な導入を図ることが重要である。

※〔知識及び技能〕（1）英語の特徴やきまりに関する事項 における記載

Ⅰ 文、文構造及び文法事項

（ア）文構造のうち、活用頻度の高いもの

ここでの活用頻度の高いものとは、2の（3）の「②言語の働きに関する事項」に示された「ア 言語の使用場面の例」や「イ 言語の働きの例」に挙げられている場面や働きにおいてよく使われる文構造のことである。応用性や発展性に富み、本科目の言語活動で運用させることを通して定着を図るのに適したものを指す。

【参考】現行の学習指導要領（本文）における「言語の使用場面」の例

※下線は、当該学校種等で初めて取り扱うもの

小学校 外国語活動	小学校 外国語	中学校	高等学校（英コミュI）
<p>(ア) 児童の身近な暮らしに関わる場面</p> <ul style="list-style-type: none"> 家庭での生活 学校での学習や活動 地域の行事 子供の遊び など 	<p>(ア) 児童の身近な暮らしに関わる場面</p> <ul style="list-style-type: none"> 家庭での生活 学校での学習や活動 地域の行事 など 	<p>(ア) 生徒の身近な暮らしに関わる場面</p> <ul style="list-style-type: none"> 家庭での生活 学校での学習や活動 地域の行事 など 	<p>(ア) 生徒の暮らしに関わる場面</p> <ul style="list-style-type: none"> 家庭での生活 学校での学習や活動 <u>地域での活動</u> <u>職場での活動</u> など
<p>(イ) 特有の表現がよく使われる場面</p> <ul style="list-style-type: none"> 挨拶 自己紹介 買物 食事 道案内 など 	<p>(イ) 特有の表現がよく使われる場面</p> <ul style="list-style-type: none"> 挨拶 自己紹介 買物 食事 道案内 <u>旅行</u> など 	<p>(イ) 特有の表現がよく使われる場面</p> <ul style="list-style-type: none"> 自己紹介 買物 食事 道案内 旅行 <u>電話での対応</u> <u>手紙や電子メールのやり取り</u> など 	<p><u>(イ) 多様な手段を通して情報などを得る場面</u></p> <ul style="list-style-type: none"> 本, 新聞, 雑誌などを読むこと テレビや映画, 動画, ラジオなどを観たり, 聞いたりすること 情報通信ネットワークを活用すること など <p>(ウ) 特有の表現がよく使われる場面</p> <ul style="list-style-type: none"> 買物 食事 旅行 電話での対応 手紙や電子メールのやり取り など